

「フィンランド宗教改革における 教育学的変化の考察」¹

五十嵐 成 見

1. はじめに

筆者による近年の研究は、北欧国家において高福祉制度を成立させている普遍主義の原則の思想的淵源、またその高福祉制度を可能としている社会民主主義体制の形成過程を、フィンランドを対象にしてキリスト教的観点から考察することである。その研究の一環として筆者は現代フィンランドに至る教育学的変化のルーツ及び形成過程を、宗教改革以来国教会及び国民教会として認識されているルーテル派及びその他のキリスト教派の観点を基軸にして考察し、その特色を他の機会において明らかにしている。² 本論文はその内容の続編として接続しつつ、特に現代にまで至るフィンランド国家形成に関わる根本的な教育学的変化を指摘することに独自の目的を置く。さらに19世紀から20世紀における社会民主主義政策へとつながる段階を考察する上での予備的考察としても位置づけられる。

本論文において、宗教改革の影響による教育面における変化の具体的内容を3点指摘する。すなわち、1. アグリコラによる母国語改革、2. ゲゼリウスらによるルター派カテキズム教育の浸透化、3. トウルクアカデミーの創設及び発展、を各章において考察し、最後に結語を述べる。

¹ 本論文は、JSPS 科研費 22K12992 「フィンランド福祉制度におけるルター派思想の影響：普遍主義の原則の形成過程を巡って」(2022-2024 年度、研究代表者：五十嵐成見)、及び 2022 年度第 3 次東京女子大学海外交流研究費(研究課題名「フィンランド福祉制度におけるルター派思想の影響」、申請者：五十嵐成見)の助成を受けている。

² 詳細は、拙論「フィンランド宗教改革の影響に関する考察—社会民主主義体制との関わり—」(『キリスト教と諸学 34 巻』所収、聖学院キリスト教センター、2023 年 3 月 31 日)、を参照のこと。

2. アグリコラによる母国語改革

初めに本章において M・アグリコラによるフィンランド宗教改革の詳細及びその特質とを考察する。

2-1. 母国語改革の背景

スウェーデン国王グスタフ・ヴァサが司教任職を巡り、ローマ教皇クレメント7世と対立したことを契機にして次第にルター派を国教会として導入するようになった際、礼拝を母国語によって執行しようとする運動も生じるようになった。³1530年、ストックホルムの市議会は礼拝をスウェーデン語によって行うことを決議し、翌年宗教改革第1世代の担い手であったオラウス・ペトリが M・ルターの神学に影響を受けた礼拝指導書を作成する。さらに1536年には、ウプサラ教会会議においてスウェーデン語による礼拝を行うことが可決され、スウェーデンにおけるプロテスタント宗教改革運動は礼拝改革としても展開されていくこととなる。

一方、フィンランド領となるトゥルク教区地域では、1534年にローレンティウス・キャンティがスウェーデン語による礼拝を行った。これはオラウス・ペトリの礼拝指導書による影響が大きいと思われるが、この出来事はフィンランド語としての礼拝が未だ成立していなかったことを意味していると考えられる。スウェーデン語は既に書き言葉が成立していたために文字文化が発展していた。しかしフィンランド領となるトゥルク地域では、約80%の住民がフィンランド語を話すことができ、また書き言葉は文字自体としては存在していたものの、名前や場所の記載のみに使用されるに留まっていた。⁴そこでフィンランドがルター派宗教改革を受け入れていくための不可欠な課

³ ヴァサのルター主義導入の経緯については、拙論「フィンランド宗教改革の影響に関する考察」、112-115頁、を参照のこと。

⁴ フィンランド宗教改革以前のフィンランド語による資料は今日に至るまで発見されてはいない。Markku Heikkilä & Simo Heininen, *A History of the Finnish Church* (Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, 2016), 58. [以下、Heikkilä & Heininen, *A History of the Finnish Church*, と表記]

題として、文字文化としてのフィンランド語を成立させるための表記法を確立させる必要が生じた。この困難な課題を担い、その変革を成し遂げた人物がM. アグリコラである。

2-2. アグリコラの生涯

ミカエル・アグリコラ（本名：Mikael Olavinpoika）は、正確な記録が残存していないものの、おそらく1510年ごろ、ウーシマー地域のペルノ（Perna）教区にあるツースビ（Torsby）に生まれた。⁵ 父は祖父の代から続くペルノの豪農として知られており、妻と3人の娘がいた。ペルノは、もともと地理的にはフィンランド語の言語地域であったが、スウェーデン語が優位であったためミカエルも基本的にスウェーデン語を話しつつ、フィンランド語も日常的に会話する環境にあったと思われる。⁶

ミカエルは幼い時から勉学の才に優れており、本来ならば家業を継いで農夫となるのが適当と見なされていた時代的雰囲気の中、ヴィボルグにある司祭養成学校に10歳で通うことが許可される。この学校でミカエルは姓をアグリコラ（Agricora、農夫の意味）とラテン語表記に変更し、以後この名前を使用していく。

1528年、アグリコラは彼の指導者であったヨハネス・エラスムッスン（Johannes Erasmussen）とともにトゥルクに移る。新しくトゥルクの司教となったドミニコ会出身司祭マルティヌス・スキッデの行政運営上の書記官をエラスムッスンが務めるためであった。しかしながら、翌年エラスムッスンが疫病に罹患して急死し、その代わりにアグリコラがスキッデの書記官を

⁵ Kaisa Häkkinen, *Spreading the Written Word: Mikael Agricola and the Birth of Literary Finnish* (Helsinki: Finnish Literature Society, 2015), 31. [以下、Häkkinen, *Spreading*, と表記]

⁶ アグリコラの第一言語がスウェーデン語かフィンランド語であったかは明確な見解が記されておらず、現在もお研究史的課題とされている。Jason Lavery, *Reforming Finland: The Diocese of Turku in the Age of Gustav Vasa 1523-1560* (Leiden: Brill, 2018), 37. (以下、Lavery, *Reforming*, と表記)。

務めることとなった。やがて 1530 年に司祭として叙階され、教職としての働きが開始される。

1536 年、アグリコラは幼いころからの友人であり同僚だったマルティヌス・テイトとともに、ヴィッテンベルクへと留学することとなった。これはスウェーデンにおける宗教改革草創期において画期的なことであった。それは中世時代において留学は司祭教育において一般的であったものの、ヴァサが王になって以降、教会財産徴収策が導入されたことで、教会財政がひっ迫し、留学活動が中断されていたからである。⁷ しかしながら先見の明のあるフィンランド出身の司祭スキッデが司教となったことにより、フィンランドの今後を見据えて、少数ではあったものの留学が再開されるようになったのである。⁸ アグリコラはヴァサが留学を許可して以降、4 人目の留学生である。⁹

このヴィッテンベルクへの留学を通じて、アグリコラはドイツの改革者 M・ルター及び P・メランヒトンに出会い、直接彼らの薫陶を受けることとなる。ルターはカトリック教会における高尚なラテン語ミサではなく、広く民衆に浸透していた母国語としてのドイツ語で礼拝を行い、さらに聖書を読むことができるようにするべく翻訳を推奨していた。またメランヒトンは、プロテスタントとしての信仰教理内容を社会に持続的に浸透させるための組織アプローチの教示に長けていた。アグリコラは、留学を通じてプロテスタント宗教改革運動をフィンランド内に展開するための学術的・実践的基礎を培うことになっていった。

1539 年春、アグリコラはテイト及びジョージ・ノーマンと共にフィンランド領に帰国した後、トゥルク司教区学校の校長として奉職する。アグリコラは司教区学校運営の行政上の責務を務めつつ、1543 年、最初にして重要な業績としてフィンランド語の言語入門書である「ABC ブックス」(“Abckiria”)

⁷ Lavery, *Reforming*, 90.

⁸ 拙論「フィンランド宗教改革の影響に関する考察」、121-122 頁、124 頁、参照。

⁹ Lavery, *Reforming*, 90.

を出版する。さらに翌年の1544年には「祈祷書」を翻訳出版、1548年にフィンランド語の新約聖書を出版するなど、今後のフィンランド宗教改革を形成する重要な業績を短期間でこなしていった。1548年にはトゥルク大聖堂学校の学長を退くことによって研究時間を確保することができたことも幸いし、翌年、“Käsikiria”, “Messu”, “Pina”という一連の礼拝指導書を出版する。¹⁰ これらの礼拝指導書出版によって、アグリコラはフィンランドにおけるルター派礼拝の標準化及び母国語化に大きな影響を与えた。

その後アグリコラは、スキッデ司教が逝去した直後の1550年、トゥルク教区司教代理を務め、やがて1554年にトゥルク教区司教に正式に選出・叙階され、教区内での多種多様な課題をこなしていった。特に同年から生じたロシア-スウェーデン戦争の対処に追われつつ、戦争によって亡くなった教区牧師の欠員を生じないように努力するなど、有事の最中であってトゥルク教区の安定した運営に努めた。1557年、ロシア-スウェーデン戦争終結によるノヴゴロド条約の締結のため、ヴァサ王を始めとする代表団の一員として加わりモスクワに滞在したが、困難な状況による条約終結後、極寒の環境による体調悪化によって急逝した。¹¹

2-3. アグリコラの業績

以上のように、アグリコラの生涯を端的に概観したが、彼の為した宗教改革期における重要な貢献として、主に2点挙げることができる。一つはフィンランド語の書き言葉を解説した「ABCブックス」の発行、もう一つは新約聖書を含めた信仰書の翻訳である。

アグリコラのフィンランド文化への最大の業績は、フィンランド語における書き言葉・文字文化の成立に関する根本的貢献を為したことである。アグリコラの最初の出版物は、1543年の「ABCブックス」であったが、これは

¹⁰ Häkkinen, *Spreading*, 47.

¹¹ なお、現在もアグリコラの墓は発見されていない。Häkkinen, *Spreading*, 52.

フィンランド語のスプリングを順に辿った書き言葉としてのフィンランド語入門書であった。アグリコラは、ただフィンランド語で聖書や礼拝指南書などが翻訳されるだけではなくして、将来にわたって持続的・永続的に利用される形で浸透させる必要があると考えた。それ故に、聖書翻訳よりも先んじて、書き言葉としてのフィンランド語入門書としての「ABC ブックス」を出版したと考えられる。¹²

また、アグリコラは「ABC ブックス」を書き言葉としての入門書として位置づけただけではなく、今後のルター派宗教改革運動における信仰教育を見据えたうえでカテキズムの機能を盛り込んだ。内容としては、それぞれのアルファベットが分析された後、「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」、「聖母マリアの祈り」及び日々の朝晩の祈りの言葉を掲載した。これらは日々の生活や礼拝の中で三要文及び祈祷文が使用されることを想定したものである。さらには、洗礼式、堅信礼及び聖餐式の説明を加え、キリスト者としての人生における sacrament の意義が理解できるようにも配慮されていた。カテキズムの内容自体は、基本的にルターとメランヒトンによって作成された小教理問答の内容に多くを負っている。ただし逐語的ではなく、例えばドイツ版カテキズムには盛り込まれていない中世時代に用いられていた晩鐘の際の祈りなども掲載されており、アグリコラ独自の判断による内容構成となっている。

「ABC ブックス」はその後 1549 年、1559 年の 2 回にわたって改版がなされ、フィンランド内で使用されるようになる。ただ実際のところは、「ABC ブックス」を使用できたのは高等な文字教育を施された識字が可能な牧師であったため、主に教会における信仰教育の指導の際に用いられた。したがって、宗教改革期時代においては広く民衆に行き渡る形で「ABC ブックス」が読まれることはなかった。商人を含めて一般民衆における識字率は未だ低かったためである。この識字率の向上は、次章で考察するように宗教改革を継承する世代におけるカテキズム教育の浸透化によって果たされていくこと

¹² Lavery, *Reforming*, 141.

となる。

次に、「ABC ブックス」に続くアグリコラの貢献として挙げられるのが、新約聖書を含む信仰形成書の翻訳である。1544年、アグリコラは「祈祷書」(“Rucouskirja”)を出版する。これは678もの数の祈りの言葉が887頁にわたって掲載された大著である。この祈祷書においてアグリコラが選択した祈りの言葉の出自は多岐にわたっている。1488年にスウェーデン語にて編纂された“Missale Aboense”から引用した祈祷が約3分の1を占めているが、ルターとメランヒトンの祈祷が掲載されている他、1535年にエラスムスによって出版された祈祷書からも38作が引用されている。これらのアグリコラによる他種多様な祈りの言葉の選択は、アグリコラが保守的なルター主義、あるいは急進的なプロテスタンティズム理解に留まらない幅広い神学的見方を持ち合わせていたことを理解する手がかりといえる。¹³

そして1548年に新約聖書を出版する。この訳業は、前述の祈祷書における翻訳作業によって体得された翻訳理論や技量の成熟度がよりよく生かされたものとなっている。¹⁴ アグリコラは新約聖書を掲載した序文において、12世紀におけるキリスト教伝播から始まったフィンランド・キリスト教史の概要を叙述し、さらにはフィンランドの地域と言語の意義について言及し、フィンランドにおけるトゥルク地域の重要性を明らかにしている。

またアグリコラは、新約原典のギリシャ語本文から全て翻訳するのではなく、ウルガタ聖書によるラテン語、エラスムスの翻訳によるラテン語、ルターの翻訳した聖書によるドイツ語、さらには1541年にスウェーデン語にて翻訳されたグスタフ・ヴァサ聖書に至るまで幅広く参照しながらフィンランド語への聖書翻訳を行っている。この新約聖書翻訳の仕方においても、祈祷書の編纂の方法と同様に、特定の神学的主張にしたがって翻訳する仕方

¹³ この影響は、ヴィッテンベルクにおいてルターに師事していた影響以前に、ヴィボルグ時代においてアグリコラが人文主義に精通していたことが背景にある、とも考えられる。

¹⁴ Lavery, *Reforming*, 144.

はないアグリコラなりの独自の立場が表れているということが出来る。

新約聖書の出版後、旧約聖書の翻訳にも着手し、1551年に「詩編」の全体を翻訳、また「モーセ5書」及び「イザヤ書」、「エレミヤ書」、「エゼキエル書」、「ダニエル書」の部分翻訳し、1552年には12小預言書のうち、「ハガイ書」、「ゼカリヤ書」、「マラキ書」を翻訳する。

この一連の作業を通して理解される通り、アグリコラは最終的に旧約聖書全体の翻訳を含めた印刷出版を行う構想を持っていた。しかしながら、ヴァサ王による教会財政緊縮策の持続的な影響をうけ、アグリコラの生前において新旧聖書全体が印刷・出版されることはなかった。最終的に聖書全体の印刷・出版がなされたのは1642年である。

新約聖書の出版から日を開けることなく、アグリコラは1549年に礼拝指南書(“Messu”)を翻訳出版する。この礼拝指南書において、中世時代の伝統が継承されている関係で翻訳者の明記はなされていないものの、“Messu”に使用されている挿絵がアグリコラの翻訳書にも掲載されていること、発行責任者がアムンド・ローレンソンというアグリコラの翻訳書を出版した経験を持つ人物であること、さらに決定的なのはアグリコラ自身が翻訳した「詩編」の中で、自分が“Messu”を編纂したことを明かしていることなどから、この礼拝指南書の著者がアグリコラであることは極めて蓋然性が高い。¹⁵

“Messu”は、O・ペトリがルターの『ドイツミサと礼拝の順序』を参考にして作成したスウェーデン語の礼拝指南書をベースとしている。しかしヌーティラによれば、ペトリ ver. とアグリコラ ver. とは3つの重要な相違がある。一つ目は、アグリコラ ver. が、全体的な内容においてトゥルク司教区における中世的伝統の礼拝形式を保持していること、二つ目は部分的な内容においては、アグリコラ ver. がペトリ ver. よりもルター的な礼拝形式に変化していること、三つ目がペトリ ver. に比べてアグリコラ ver. の方が一貫

¹⁵ Lavery, *Reforming*, 147.

して母国語、つまりフィンランド語を使用しているということである。¹⁶

この判断から推測できることは、アグリコラにおける礼拝改革は神学的観点によるプロテスタント的な礼拝内容の刷新を意図していたわけではなく、母国語としてのフィンランド語を使用して礼拝を行うこと自体に主眼が置かれていたということである。ヤーソンは、スウェーデンにおける礼拝の内容変化は、宗教改革以前の1488年における“Missale Aboence”及び1522年の“Manuale Aboense”（後者の礼拝指導書はまだヴァサ王がルター主義を認める前に出版されている）によって多くなされていた故に、アグリコラ自身大きく礼拝形式を変更させる必要を感じなかった、と判断しているが蓋然性の高い見解である。¹⁷

2-4. アグリコラによる母国語改革における特徴

以上、アグリコラにおけるフィンランド宗教改革における貢献を考察したが、その特質を三点挙げる。

一点目は、「ABC ブックス」の出版によるフィンランド語の書き言葉の表記法の成立が、現代にまで至るフィンランド文化国家形成に対して根本的な影響を与えたことである。また、特に本研究が主眼としている関心に即していえば、その文化形成に際して、アグリコラがカテキズム教育を軸としたルター派的キリスト教教育を通して形成する道を企図していたということである。カテキズム教育の導入は次章において考察するように、宗教改革期において萌芽しながらもフィンランド全体においては17世紀になってから浸透していった教育法であるが、このルター派的キリスト教教育文化を生じさせる端緒としての働きをアグリコラは「ABC ブックス」を通して成し遂げたことになる。「ABC ブックス」の出現によって、フィンランド語教育における読み書きの能力の発展の基礎が据えられたこととなるが、同時にフィンラ

¹⁶ Cf. Lavery, *Reforming*, 147.

¹⁷ Lavery, *Reforming*, 148.

ンドがプロテスタント・ルター派国家として成立・発展するための言語的基礎が築かれたことともなった。

二点目として挙げられることは、アグリコラが広範な学術的知見に基づいた、特定の神学主義に拘泥しない漸進主義的改革者だったことである。この観点に関して言えば、スウェーデン主教改革第一世代のオラウス・ペトリやローレンティウスがラディカルかつ急進的なルター派運動を希求したのとは対照的である。アグリコラはルター派を基軸としながらも、より幅広い神学的観点に基づき、緩やかな変化によってフィンランド宗教改革を内部から果たしていったと見なすことができる。

アグリコラは、聖書及び信仰書の翻訳を行ったものの神学的著作は表していない。¹⁸ よって、フィンランド改革において強い主張を伴った運動はアグリコラ自身の活動からは見出すことはできない。また聖書の翻訳に際しても、ギリシャ語からの翻訳のみならずラテン語、ドイツ語、スウェーデン語など様々な言語に訳された聖書翻訳を参照しつつ、一番フィンランド語として定着しやすい訳語を使用して翻訳を行っている。さらに礼拝指導書の作成についても1488年の“Missale Aboence”の形式の多くを踏襲したマイルドな変化を伴ったミニマムアプローチをとっており、当時の聖職者にとって比較的实践しやすい内容となっている。すなわち、アグリコラにおける宗教改革はルターのような理念型アプローチではなく、プラグマティックなアプローチだったと判断することができる。

結果として生じたアグリコラの漸進主義的方法は、フィンランドの教会内部に大きな混乱や対立をもたらすことなく、ルター派へと緩やかに移行することに重要な影響を与えた。因みに、アグリコラが為した漸進主義的方法は、同じくルター派国家への移行に際してヴァサ王がなした漸進主義的方法とも重なり合う。¹⁹

¹⁸ Lavery, *Reforming*, 140.

¹⁹ ヴァサによる漸進主義については、拙論「フィンランド宗教改革の影響に関する考察—社会民主主義体制との関わり—」、114-115頁、を参照のこと。

最後に指摘しておくべきこととしては、アグリコラによる聖書翻訳や祈祷書の編纂の業績は、確かに卓越した内容を持っているものの、それらの一連の訳業を印刷・出版することによって歴史的な貢献へとつなげることができたことである。

そもそもスウェーデン宗教改革が生じた当初、スウェーデン領内には印刷所が存在しておらず、必要の際にはヨーロッパ大陸に渡り、ドイツやリュベックなどに赴いて印刷を依頼する必要があった。²⁰ 母国語の文献を定期的に生み出すために、自国での印刷所の必要を痛感したヴァサ王政府が、1520年代になってはじめて印刷所をストックホルムに開設し、そこから自前の印刷が可能となっていったのである。²¹ 印刷所の利用には、ヴァサ王の許可が必要であった。しかしアグリコラの場合、若くしてトゥルク司教区の行政書記官を勤めてヴァサ王と近い関係にあったため、「ABC ブックス」を初めとした一連の訳業の印刷が可能だったと考えられる。

3. カテキズム教育

前章において、アグリコラが「ABC ブックス」に、ルターの小教理問答に基づいたカテキズムを盛り込んだことに言及したが、本章ではその著作を端緒とした宗教改革期以降のカテキズム導入による教育学的影響について考察していく。

3-1. カテキズム教育の端緒

フィンランドがローマ・カトリック教会から離脱し、ルター派を国教として採用してからとりわけ重要とされたことが、ルターの信仰理解に基づいた教育である。当初、信仰教育は両親の務めと見なされていたものの、組織的な教育の必要性から、1569年の教会法の成立を通して、親が子どもへの教

²⁰ Häkkinen, *Spreading*, 27.

²¹ Häkkinen, *Spreading*, 28.

育を果たせない場合には教区吏官が子どもたちの信仰教育の世話をすることが指示された。また必要な場合には子どもを教区吏官学校に送ることも推奨され、吏官らは適齢期の青年たちが初聖餐を受ける前にカテキズムを学ばせる判断を担う権利を持つこととなった。

1562年には、カテキズム教育において学ぶべき内容に「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」が加えられ、1571年には青少年のみならず高齢者を含めた全ての世代にまで教育が及ぶべきことが示された。²²

以上の教会法の成立によって、一般民衆に対するカテキズム教育が法的に整備されていく。これらの法整備によって教区における信仰教育の責務を負うこととなった教区吏官は、教区内の村々を巡って堅信礼クラスを開催し、参加者らにカテキズムを暗誦させ、最後にカテキズムを覚えているかどうかを判断する試験を行った。²³

アグリコラによる「ABC ブックス」のカテキズム内容を継承し、小教理問答及び牧師への指導用としての大教理問答を出版したのがトゥルク司教エリクス・ソロライネン（在位：1583-1625）である。また彼は、牧師らが礼拝説教を作成する際の手引きとするための説教集を作成するが、この説教集もアグリコラの「ABC ブックス」の影響を色濃く受けたものである。

ただし、これらのカテキズムは、カテキズムを指導する牧師や教区吏官に向けた教案としての性格が強いものであり、民衆がカテキズム内容を、識字によって自ら修得することができるような内容として企図されたカテキズム書は未だ存在していなかった。

²² Hannele Niemi & Kaius Sinnemäki, “The Role of Lutheran Values in the Success of the Finnish Educational System”, in *On the Legacy of Lutheranism in Finland: Social Perspectives* (Kaius Sinnemäki Anneli Portman, Jouni Tilli, Robert H. Nelson [ed.] [以下、Niemi & Sinnemäki, “The Role of Lutheran Values” *On the Legacy of Lutheranism*, と表記], 118.

²³ またその堅信礼クラスは、カテキズム以外にも日常に関する学びを教示する機能も果たしていた。Niemi & Sinnemäki, “The Role of Lutheran Values”, *On the Legacy of Lutheranism*, 118.

3-2. ゲゼリウスのカテキズム教育とその内容

カテキズム教育における民衆への一般化のために大きな貢献をなしたのがトゥルク司教・老ヨハネス・ゲゼリウス（在位：1664-1690）である。ゲゼリウスは、フィンランド内により広くカテキズム教育が行き渡るためには印刷出版のシステムが不可欠であることを熟知していた。そのため製本屋を雇い、自前で本を印刷・出版し、さらには販売できるシステムを取り入れることに成功した。このことによってフィンランドにおける識字教育が向上する契機が生じるようになった。

1666年、老ゲゼリウスはカテキズム集をフィンランド語とスウェーデン語の両方で出版する。このカテキズム集は4部構成となっているが、一般民衆にカテキズムを指導する際の順序が意図されているものであり、教育学的な配慮がなされている。

第1部においては「ABC ブックス」に記されたカテキズム本文そのものが、解説文が加えられることなく書かれている。第2部においてはルターによる「小教理問答」の本文が書かれているが、第1部と異なり小教理問答の解説文が記されている。第3部ではカテキズムの内容がより詳細に解説され、最後の第4部では「聖書の言葉による手引き」と題され、様々な聖書の章句を参照することができる内容となっている。

このカテキズム集によって指導を受ける者は、第1部におけるカテキズム内容をそのまま暗誦できるようになることが想定されているが、続く第2部においてはルターによる「小教理問答」の文言の暗誦よりも、内容が把握できるように配慮されている。つまり第1部では、一般民衆向けに教理本文そのものを覚え込ませることに重点が置かれており、第2部以降は個人におけるカテキズム内容の把握や読書用に企図されているのである。²⁴

老ゲゼリウスは、フィンランド語のカテキズム集を版を重ねて出版し

²⁴ Heikkilä & Heininen, *A History of the Finnish Church*, 142-143.

た。²⁵ また老ゲゼリウスの死後もカテキズム集は出版され続け、その最終版は1914年にまで至り、20世紀までのフィンランドにおけるカテキズム教理のスタンダードとして使用された。²⁶

やがて17世紀後半には、カテキズム教育を基準とした教育システムが、社会形成の基礎として定着していくようになる。カテキズムの習得は、初聖餐にあずかる際の条件としてだけでなく、結婚する際や、幼児洗礼を受ける子どもの代父・代母になる際にも求められるなど、一般民衆の生活全体に関わる義務として重んじられていくようになった。²⁷ 牧師らは、「堅信礼集」“Rippikirja”によってカテキズム教育を施したが、この堅信礼集には、カテキズム教育に参加した者の成績表も記入する欄があり、例えば教区民が結婚する前には、その成績表から厳密にチェックされる仕組みとなっている。²⁸

さらに老ゲゼリウスは、学校における教育プログラム“Methodus Informandi”を1683年に策定し、自らの印刷所で印刷・出版し、特に読字教育に力を注いでいくようにした。²⁹ 老ゲゼリウスにおける重要な教育学的力点は、ただカテキズムの文言が暗誦できることではなく、その内容が理解できることだった。したがって、本の読解によって個々人が信仰内容を正確に理解したりする能力こそ育む必要があるとゲゼリウスは考え、そのために印刷物を多く発行し続け、本などによる文字に触れる機会を持つことを推奨した。³⁰

この老ゲゼリウス司教の後を継いでトゥルク司教となったゲゼリウス（在位：1690–1718）の時代においても、老ゲゼリウスの行った教育改革を推し進めていった結果、識字教育はフィンランドの西側領域を中心にして広まっ

²⁵ Heikkilä & Heininen, *A History of the Finnish Church*, 80.

²⁶ Tuija Laine, “From Learning the Catechism by Heart toward Independent Reading”, *On the Legacy of Lutheranism*, 142. [以下、Laine, “From Learning the Catechism”, *On the Legacy of Lutheranism*, と表記。]

²⁷ Laine, “From Learning the Catechism”, *On the Legacy of Lutheranism*, 143.

²⁸ Kirsi Salonen, “Reformation and the Medieval Roots of the Finnish Education”, in *On the Legacy of Lutheranism*, 110. [以下、Kirsi, “Reformation and the Medieval Roots”, *On the Legacy of Lutheranism*, と表記。]

²⁹ Laine, “From Learning the Catechism”, *On the Legacy of Lutheranism*, 143.

³⁰ Laine, “From Learning the Catechism”, *On the Legacy of Lutheranism*, 144.

ていくようになった。18世紀末には、なお東フィンランド地域との差はあったものの、識字率はフィンランド内の約7割に至るようになっていき19世紀における公教育の導入の素地となっていた。³¹ 従って、フィンランドにおける識字率は老ゲゼリウス以降におけるカテキズム教育の浸透化に伴って向上していったのである。

3. トゥルクアカデミーの設立・発展

前章においては、カテキズム教育の成立とその発展について考察してきたが、宗教改革期から1800年代の公教育導入に至る教育学的変化の中でカテキズム教育の導入と共に重要なのが、トゥルク王立アカデミーの成立および発展であった。本節ではトゥルクアカデミーの成立およびその発展について言及していく。

3-1. トゥルクアカデミーの設立の目的

トゥルクアカデミーの前身として位置づけられるトゥルク大聖堂学校は、中世期における13世紀末～14世紀ごろにかけて設立され、司祭養成のための高等教育を施すフィンランドの唯一の教育機関として機能していた。トゥルクアカデミーは、このトゥルク大聖堂学校の理念を継承しつつ1640年に設立されたフィンランドにおける初の大学機関である。1638年に王政府が設立を決定し、当時13歳のクリスティーナ女王の署名によって1640年3月26日に憲章が発布、1640年7月15日に開学する。初代学長は政府監督ブラーエが就任し、副学長としてトゥルク司教I・ロソヴィウス（在位：1627-1652）が担った。以降、トゥルク司教が副学長を兼務する伝統が1818年まで続くこととなる。³²

³¹ Laine, "From Learning the Catechism", *On the Legacy of Lutheranism*, 146.

³² ヤコブ・テングストロムがトゥルク司教を辞任した1822年以降は、副学長は配置されなくなり、代わりに政府の代表が代理学長としてスーパーバイズした。Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 119.

創立時のトゥルクアカデミーは、神学部、哲学部、法学部、薬学部の4つの学部を有した。³³ この中で最も格式のある学部として認知されていたのは神学部である。³⁴ これはトゥルクアカデミーの働きとして牧師養成が主軸であったことを意味している。特にフィンランドとしてのトゥルク教区地域においては、スウェーデンに比べてカトリシズムからルター主義への移行が緩やかであった。また、文化の成熟度としてもスウェーデンに比べて発展している状態ではなかった。そのため、ブラーエが更なるルター主義の浸透・教化が必要であることをスウェーデン政府に提言し、大学設立が実現化したのである。³⁵ そのため、ルター派の教理指導を司る牧師養成は宗教政治的な観点からも必要不可欠の事柄であった。

また牧師養成は市民社会の形成・発展のためにも重要であった。これは、当時牧師が教区における指導者とともに世俗的にも政治的役割を果たす地位を持っていたからである。そのため、政府の管理下で正しく教育・政治を執行できる牧師の育成が社会形成に直結したのである。当時、礼拝における説教はメディアとしての役割を果たしていたし、地方行政の長なども牧師が負っていた。高度な牧師養成教育によって、教会組織を管理することだけでなく地方行政の管理をも果たす人物を創出することが求められていたのである。

この牧師養成としての機能を主軸とした点において、トゥルクアカデミー

³³ Jussi, Välimaa, *A History of Finnish Higher Education from the Middle Ages to the 21st Century* (Gewerbestrasse: Springer, 2019), 83. [以下、Jussi, *A History of Finnish Higher Education* と表記。]

³⁴ また教授の給与も神学部が各学部の中で一番高給であったが、それは神学部の教授たちは教区牧師として働いたため、地方当局からも収入を得ていたからである。とはいえ、教授職は、教区の役職に比べるとそれほど高い地位ではなかったため、最後まで教授職にとどまるものはそれほど多くなかった。(Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 84.)

その後、1746年に、経済学の専門職養成の学科が配置されるようになったが、ヨーロッパ全土の中でも最も早い設置の1つとして数えられている。(Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 90.)

³⁵ Heikkilä & Heininen, *A History of the Finnish Church*, 74.

はトゥルク大聖堂学校との連続性を伴っているといえる。しかしトゥルク大聖堂学校と異なる目的は、トゥルクアカデミーを通してより広範な市民社会形成を企図したことである。

この点を明らかにしているがトゥルクアカデミーの憲章である。ヴァリマーは、この憲章においてアカデミーの設立に関して大部して6つの目的及び主張が想定されていると考察する。³⁶ それは、1、フィンランドにおける市民社会の育成、2、王政府に仕える役人の人材育成、3、忠実なルター派牧師の養成、4、スウェーデンの中心都市に位置するウプサラ大学と同じ権威を有する大学をフィンランドが保有することの意義、5、ヨーロッパ大陸と同じ大学制の伝統を持つ大学、6、ギムナジウムから大学制（アカデミー）への変化、である。

このうち教育面としての目的としては、フィンランドにおける市民社会の育成、王政府の役人となる人材の育成、ルター派牧師の養成、が挙げられる。特に王政府の役人となる人材の育成は、ヴァサ王の行ったルター派宗教改革によって政府による中央集権化が図られるようになっていたため、行政運営面のためによりよく教育された人材の育成が急務であった。つまりトゥルクアカデミーは、政府を中心とした官僚体制をフィンランドに形成するための人材を生み出す拠点となっていったのである。

以上のように、トゥルクアカデミーは、牧師養成を含めた広範な市民社会の形成のための教育機関として位置づけられた。特に、主に貴族や商人などの子どもがトゥルクアカデミーにおいて教育を受け、語学及び人文知を得ることを通して市民社会としての共同体形成が図られていくことになった。それがやがてフィンランド社会全体の向上化につながっていったのである。³⁷

³⁶ Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 78–80.

³⁷ なお、憲章に現れ出ている理由に加えて、大学設立のもう一つの目的としては、スウェーデン及びフィンランドが30年戦争に加勢して以来、政府にとって兵隊の増員が必要であり、その宣伝、プロパガンダのために、当時のマスメディアとしての機能を有していた牧師の説教を利用したい思いがあったためである。そのため、国外に留学させて牧師を要請するよりも、自国において、特にフィンランド語によってフィンランド人にプロパガンダを喧伝するために、自国内で牧師を要請する必要があった。Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 76.

3-2. ナショナル・アイデンティティ形成の拠点としてのアカデミー

ところで前述した憲章の解釈において、ヴァリマーが「フィンランドにおける市民社会の形成」を大学設立の目的として端的に挙げていたが、この簡潔な指摘は補足を要するものである。なぜならトゥルクアカデミーの設立の前提にあったのが、グスタフ・アドルフ2世（在位：1611-1632）以降スウェーデンが北方の大国として覇権国家となった時期（Age of Greatness）において生じた、フィンランド地域に対する「スウェーデン化」政策でもあったからである。³⁸ 初代副学長となったトゥルク司教I・ロソヴィウスはスウェーデン人であったが、その後のトゥルク司教も、フィンランド出身のK・メナダー（在位：1757-1775）が就任するまで、1人を除き全員がスウェーデン出身の者であった。当初のトゥルクアカデミーの教員構成もスウェーデン人が多く占められており、必ずしもスウェーデン政府がフィンランド地域の独自性を積極的に形成する目的で大学設立を想定したわけではないことが、その人事の経緯から推察することができる。

しかし18世紀に入ってから、トゥルクアカデミー内においてフィンランド出身の教授を増やすことによって「フィンランド化」を推進しようとするナショナルスティックな動きが生じるようになってきた。³⁹ これはスウェーデン王グスタフ3世（在位1771-1792年）の時代に、スウェーデンにおいてナショナリズム的傾向が強くなったことに伴い、フィンランドにおいてもその反動で同様の傾向を持つようになったことによる。⁴⁰ この流れにより、トゥルクアカデミーを介したフィンランド文化の勃興への奮起が生じるようになっていく。スウェーデンに属するフィンランドではなくて、大公国としての独自のアイデンティティを培う場としてトゥルクアカデミーはこの後、特に1809年にスウェーデンから分離してロシアの大公国化した際のナショ

³⁸ Heikkilä & Heininen, *A History of the Finnish Church*, 68-69.

³⁹ Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 90.

⁴⁰ スウェーデン化政策に対抗するトゥルクアカデミーの代表格がダニエル・ユスレニウスである。Heikkilä & Heininen, *A History of the Finnish Church*, 70.

ナリズムの勃興と強化の働きに重要な役割を担っていくようになっていくし、さらには19世紀後半における独立運動を鼓舞する働きも担うようになっていったのである。

また、トゥルクアカデミーをはじめとするフィンランド・ナショナリズムへの意識の高まりは、フィンランド人としてアイデンティティを醸成しただけではなく、階級社会における地位の差別化への意識を薄める働きをした。⁴¹そしてこの意識が公共福祉に対する積極的な受容を促したのである。⁴²

4. 結語

以上、フィンランド宗教改革の影響による教育学的変化を三つの観点から考察してきたが、本論文が明らかにした点を端的に要約する形で結語とした。

まず一つ目は、M・アグリコラによる書き言葉・文字文化としてのフィンランド語の成立によって、その後のフィンランドにおけるキリスト教及び一般文化に根本的な影響を与えたことである。またアグリコラは、文字文化としてのフィンランド語の普及・定着を目的として「ABCブックス」を作成したが、ルター派信仰に基づいたカテキズムの内容を基軸とすることにより、国教として採用されたルター派信仰を広くフィンランド国民に浸透させることを企図し、また、旧新約聖書や礼拝指導書をフィンランド語に翻訳することによってルター派国家を基軸としたフィンランド文化形成の道備えを為していった。

二つ目は、老ゲゼリウス及びゲゼリウスらの努力によるカテキズム教育の発展によって、ルター派カテキズム教育が広く民衆に一般化しただけでなく、フィンランド全体の識字率の向上に不可欠な影響を与えたことである。

三つ目は、トゥルク王立アカデミーの創設が³、近現代フィンランド文化形

⁴¹ Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 98.

⁴² Jussi, *A History of Finnish Higher Education*, 97.

成に多大な影響を与えたことである。フィンランド初の大学機関として設立されたトゥルクアカデミーは、フィンランドにおける牧師養成の拠点となり、ルター派国家形成の人材育成のための不可欠な場となっただけではなく、公的行政を担う政府高官などの創出・育成の場ともなり、フィンランド社会形成の重要な役割を担うようになった。またロシアからの独立以前・以後においてフィンランドのナショナル・アイデンティティを形成・醸成する拠点として不可欠な働きを担っていった。このフィンランド人へのナショナル・アイデンティティの醸成が、階級意識を超えた平等な公的福祉への意識をも形成していくようになったのである。

これらの宗教改革期において生じた教育学的変化は、現代フィンランド国家にまで至る永続的な国家形成をもたらした要素だということができる。

キーワード：フィンランド キリスト教 ルター派 カテキズム教育